

音楽を形づくっている要素から生み出す創造的な「音楽づくり」「創作」

—子どもたちが発想をふくらませ、見通しをもってつくるための指導の工夫—

音楽科研究会議

毛利 友紀¹

青柳 美里²

伊藤 由佳子³

三浦 芳子⁴

要 約

「音楽づくり」「創作」の学習では、子どもたちが創意工夫して音楽をつくり、音楽のよさや面白さを味わう。しかし、音楽的な約束事に従って音を並べることを楽しんでいるに留まる等の状況が、時に見受けられる。そこで、子どもたちが音の面白さに気付いたり、音楽の構成を理解したりすることができ、達成感を味わえる学習となるよう、指導の工夫をしていく必要があると考えた。

本研究では「発想をふくらませ、見通しをもつための仕掛けづくり」、「活動の構成や手立ての工夫」、「共有や振り返りの場の設定」に視点を絞って検証した。その結果、魅力ある教材を選択して題材にし、導入の部分を充実させることで子どもたちは新たな発想をもち、音を試しながら見通しをもって音楽をつくっていくことができた。その後も、音楽をつくる上での約束事を音で理解したり、教師の発問や投げ掛けによって工夫のポイントに気付いたりする様子が見られた。さらに、友達の作品のよさを共有する場を設定することで、子どもは音楽を形づくっている要素がもたらす効果を改めて実感することができていた。約束事に従ってつくるだけではない、自分にとって大切な作品を完成させていくことができたのである。また、「音楽づくり」「創作」に続けて「鑑賞」の学習を関連付けて題材とした。すると、子どもが音楽を形づくっている要素やその働きをそれぞれの学習を通して繰り返し感じ取り、音楽のよさをより深く味わうことにつながると分かった。

本研究を通して、音楽を形づくっている要素を支えとして「音楽づくり」「創作」の学習を展開することによって、子どもが音や音楽に対する感性を高めていけることを再認識することができた。

キーワード：音楽を形づくっている要素、発想、見通し

目 次

I 主題設定の理由	38	2 検証授業の実際	41
1 「音楽づくり」「創作」の授業の現状と課題	38	(1) 旋律をつくる学習 A	41
2 「音楽づくり」「創作」における指導事項の 関連	38	(2) 旋律をつくる学習 B	48
3 今、求められている「音楽づくり」「創作」	39	(3) 構成を工夫して音楽をつくる学習 A	51
II 研究の内容	40	(4) 構成を工夫して音楽をつくる学習 B	55
1 指導の工夫	40	III 研究のまとめ	55
(1) 発想をふくらませ、見通しをもつための 仕掛けづくり	40	1 研究から見てきたこと	55
(2) 活動の構成や手立ての工夫	40	2 今後の課題	56
(3) 共有や振り返りの場の設定	41	参考文献	56
		指導助言者	56

¹川崎市立末長小学校教諭（長期研究員）

²川崎市立千代ヶ丘小学校教諭（研究員）

³川崎市立中野島中学校教諭（研究員）

⁴川崎市立生田中学校教諭（研究員）

I 主題設定の理由

1 「音楽づくり」「創作」の授業の現状と課題

「音楽づくり」「創作」は、創意工夫して音楽をつくる活動を通して、子どもたちが音の面白さに気付いたり、音楽の構成を理解したりすることができ、音楽のよさや面白さを味わえる学習ということができる。子どもたちが実際に音を操作し、音楽にしていくことによって、「歌唱」や「器楽」の学習だけでは得られない効果が期待でき、音楽科の学習を深めることにつながる。

授業では、子どもたちは「音楽づくり」の活動には楽しみながら取り組んでいるように見えることが多い。しかし、音楽的な約束事に従って音を並べることを楽しんでいたり、自然音や効果音に興味を示したりしているに過ぎないのではないだろうかという疑問が浮かぶこともある。

また、本市小中学校において音楽の指導を行っている教員を対象にアンケートを行ったところ、133名から回答を得た。その結果、『音楽づくり』『創作』の授業について効果的な進め方がなかなか思いつかない」と答えた教員は86.4%に上った(図1)。そのうち約半数が「活動の手順を説明する場面や、子どもの作品がまとまるまでに時間がかかってしまう。」という悩みを感じていることも分かった(図2)。

確かに、自分自身のこれまでの経験を振り返ってみても、音楽の仕組みを理解させたり、作品を発表させたりといった指導に留まってしまうこともしばしばあり、「音楽づくり」

の学習を通して音楽のよさや面白さを味わわせることについて、難しさを感じてきた。

子どもたちが音や音楽に対して抱く興味や関心を音楽的な学びの深まりにつなげるためには、教師にとっても取り組みやすく、子どもにとっても達成感のある「音楽づくり」「創作」の指導について掘り下げていく必要があると考えた。

2 「音楽づくり」「創作」における指導事項の関連

小学校「音楽づくり」において、指導事項アの学習では、声や音の特徴や面白さに気付いたり、様々な音の響きやその組合せを楽しんだりして、音楽づくりのための発想をもって即興的に表現する能力を育成していく。これは「音楽づくり」「創作」の活動の基盤となるため、この活動を十分に行っておくことが重要である。指導事項イでは、子どもたちは音楽の仕組みを生かし、思いや意図をもってまとまりのある音楽をつくっていく。音楽の仕組みを生かし、つくる音楽の形やそれに至る方法を考えることは、音を音楽に構成する能力の育成につながり、中学校の指導事項ア及びイに発展していく。

中学校の「創作」において、指導事項アでは、言葉や音階等の特徴を生かし、旋律をつくっていく。一方、指導事項イでは、音素材の特徴を生かして、反復、変化、対照等の構成や全体のまとまりを工夫

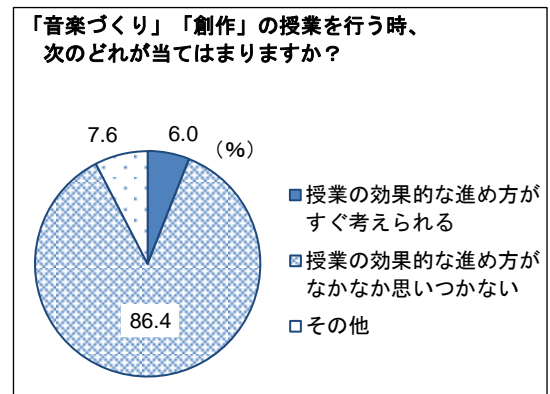


図1 「音楽づくり」「創作」の指導について

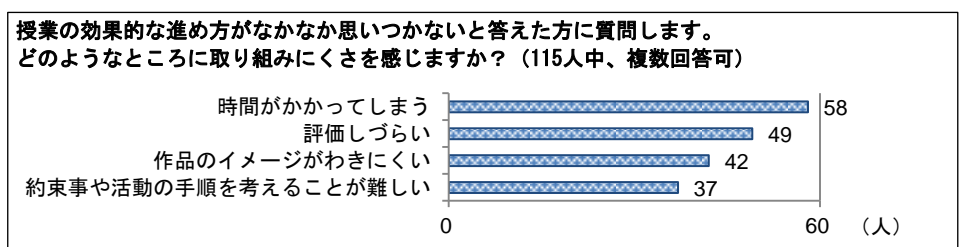


図2 「音楽づくり」「創作」の指導に取り組みにくさを感じる点

しながら音楽をつくっていく。指導事項アとイの学習で培われた力が関わり合い、創作の楽しさや喜びを実感できるようにすることが重要である。

このように指導事項アとイの関係性の質は小中学校で異なるが、それぞれは密接な関係にあり、どちらの活動も大切にしなければならない(図3)。教師は題材で取り扱う指導事項の関連を踏まえ、系統性も考慮しながら、どのように題材として構成していくかを考えていく必要がある。

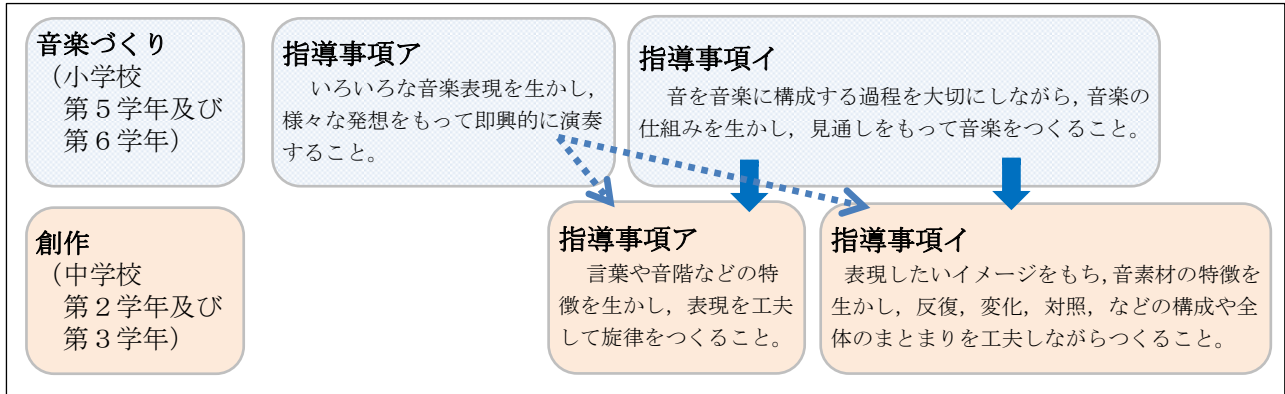


図3「音楽づくり」「創作」の指導事項

3 今、求められている「音楽づくり」「創作」

小学校及び中学校学習指導要領解説音楽編「第1章総説 3音楽科改訂の要点」には、「音楽づくり」「創作」に関して、「音を音楽に構成する過程を大切にし、(後略)」「(小学校)」「音を音楽へと構成していく体験を重視する」(中学校)と、思いや意図をもって音楽をつくることの重要性が示されている。高須は、「音楽の要素を子どもたちが実際に用いて音楽をつくっていくことで、それぞれの要素の持つ意味や意義を実感しながら、音が音楽に構成される過程を十分に体験しつつ、『音はこうすると音楽になるんだ』『音楽ってこうやってできるんだ』ということ、音や音楽そのものに接しながら理解できるようにする」としている¹。

「音を音楽に構成していく」活動とは、音に関連付けてまとまりのある音楽をつくっていくことである。そのためには、子どもたちが「リズムでお話ししているみたいだね。」「音を伸ばすとどのんびりした感じがするね。」等と、音楽を形づくっている要素に気付き、その働きによるよさや面白さを十分に感じ取ることが大切である。この活動が音楽をつくるための手掛かりを得ることにつながるためである。

子どもたちはそれらの手掛かりを生かして、「楽しい音楽をつくりたいな。」「終わりの部分はこのリズムに変えてみたらどうかね。」といった思いや意図をもち、様々なアイデアを試しながらつくっていく。その活動の中で、子どもたちは発想をふくらませ、作品の始め方や終わり方等の見通しをもって音楽を構成していく。このような過程が、子どもにとって価値のあるものをつくる活動となり、創造的な音楽表現になるのである。

そこで、子どもたちがリズムや強弱、速度、反復といった音楽を形づくっている要素に気付き、それらを手掛かりとしながら発想を得て意欲を高め、音楽の始まりから終わりまでを見通して、音楽をつくっていくよう指導を工夫することが教師の重要な役割と考え、研究主題を次のように設定した。

音楽を形づくっている要素から生み出す創造的な「音楽づくり」「創作」
—子どもたちが発想をふくらませ、見通しをもってつくるための指導の工夫—

¹ 高須一『音楽づくりの授業アイデア集 音楽をつくる・音楽を聴く』音楽之友社 2012年 p.54

Ⅱ 研究の内容

1 指導の工夫

主題設定の理由で述べたように、子どもたちが音楽を形づくっている要素から発想をふくらませ、見通しをもってつくるためには、「音楽の仕組みを理解し、音楽をつくる過程を楽しめるようにすること」「発表する体験や聴き取る活動を通して、音を音楽に構成することが実感できるようにすること」が大切であると考えた。そこで、発想をふくらませ、見通しをもつための仕掛けづくり、活動の構成や手立ての工夫、共有や振り返りの場の設定について研究を進めることとした。

(1) 発想をふくらませ、見通しをもつための仕掛けづくり

①「音楽づくり」「創作」に至るまでの仕掛け

導入時は、子どもたちに「どんなことをするのか?」「ああ、そういうことか。それならやってみたいな。」と関心をもたせ、意欲付けすることが大切である。そのためここでは、間違ってしまうことに対する不安ではなく、新たなものを生み出す楽しみを抱けるような場面を設定する必要がある。音を出すことを楽しむ遊び感覚の活動であっても、音楽的な発想や気付きをもたらし、その後の活動の充実につながるを考え、「音楽づくり」「創作」に至るまでの仕掛けを工夫することとした。

②音楽的な約束事の提示

何もないところから「音楽をつくりましょう。」と言っても、子どもたちは困惑するばかりで、学習の目標を実現することは難しくなる。そのため、音楽をつくるための約束事が必要となる。

約束事として限定されるのは、音や音階、使う楽器、音素材、音楽の仕組み等であり、そこには音楽を形づくっている要素が大きく関わってくる。音楽を形づくっている要素は、「音楽づくり」「創作」の学習だけでなく、題材全体の中で表現や鑑賞の学習を支えるものである。子どもたちに音楽的なイメージをもたせ、音楽を形づくっている要素の効果に着目させることができるよう、その約束事の内容や示し方が適切であるかどうかを吟味していく必要がある。

(2) 活動の構成や手立ての工夫

①工夫のポイントを明確にするための発問や投げ掛けの工夫

音楽的な約束事を示すと、そこから子どもたちは発想をふくらませ、様々な音楽表現を工夫していく。工夫する部分があることによって、子どもたちは新たなものを生み出す楽しさや喜びを見いだしていくことになり、創造的な活動につながっていく。そこで、音楽的な工夫につながるポイントは、子どもの発達の段階に応じて噛み砕いて伝え、発想をふくらませる力を引き出していくようにする。子どもたちが実際に音を聴き、そこから感じたことは、どんな要素の働きによるものなのかに気付けるようにするのである。そのため、工夫のポイントを明確にするための発問や投げ掛けについても研究していく。また、旋律づくりにおいては、伴奏も発想を促す手掛かりとして検討していくこととする。

②ワークシートの工夫

子どものつくった音楽をより明確な形で表す手助けとするためにワークシートを使用する。作品を記録するためだけでなく、思いや意図をもち、作品全体を見通すため、あるいは友達と思いを共有するためにもワークシートは有効な手立ての一つと考える。しかし、書くことにとらわれて十分に音を試すことができなくなるとは本末転倒である。子どもの実態に即した分量、内容、記述欄の配置であるか、どのタイミングで書かせるか等についても検討していくこととする。

③協同的な学習の場面の設定

グループやペアでの活動によって子ども同士が関わりながら発想をふくらませ、それを個人の表現にまで生かせるような学習の構成の工夫は重要である。一斉に工夫のポイントを確認する場面においても、友達作品からそのよさを感じ取って、自分の作品づくりに生かすような場面の設定が効果的であると考える。子どもたちが関わりながら学習のねらいに迫るための適切な活動の場を設定していく。

(3) 共有や振り返りの場の設定

学習の成果や課題を共有し、活動を振り返ることは、子どもたちの学習をより確かなものとするために重要な意味をもつものとする。教師は学習の過程でそのような活動を位置付け、つくった音楽のよさや面白さを価値付けていく。坪能は『間違いというもののない音楽』を子どもと共有すること「それが音楽づくり」としている²。教師は子どもたちの工夫を認め、さらに音楽的な価値を高めるため「この部分の発想がすばらしいね。例えばこの音の高さを（1オクターブ）上げてみたらどう？」等と具体的に投げ掛け、子どもの思いや意図を生かしていくことが大切である。子どもたちも自他の作品からそのよさを見いだしていけるよう、共有や振り返りの場面を設定し、発問や投げ掛けを工夫することとする。また、題材全体の中で「音楽づくり」「創作」の学習の振り返りに続けて「鑑賞」等の学習を位置付けるためには、適切な鑑賞等の教材を選択する必要がある。

2 検証授業の実際

検証授業を実施するに当たっては、小中学校の指導事項と系統性や、子どもの発達段階や学習の経験を踏まえ、**旋律をつくる学習**を小学校第4学年と中学校第2学年で、**構成を工夫して音楽をつくる学習**を小学校第2学年と中学校第2学年で行うこととし、指導の工夫が妥当であるかを検証することとした。

旋律をつくる学習とは、音やリズムの選び方を工夫し、旋律をつくる学習である。小学校では、8分の6拍子の拍の流れを感じ取りながら即興演奏したり、「問いと答え」のまとまりのある旋律をつくったりしていく。中学校では、分散和音の伴奏型に合う旋律を、既習曲を手掛かりとしながらつくっていく。小学校の約束事に弱起を加え、使うことのできる音の数や小節数を増やした。

構成を工夫して音楽をつくる学習とは、音素材の特徴を生かし、構成や全体のまとまりを工夫しながら音楽をつくる学習である。旋律をつくる学習の中でも音楽を構成することは可能であるが、ここでは音素材を生かしてリズム創作をすることで、音楽の構成に着目させていくこととした。小学校では、「反復」「問いと答え」等の仕組みに着目し、身の回りの音素材を用いてグループでまとまりのある音楽をつくっていく。中学校では、「重ねる」「問いと答え」「ドローン³」の仕組みや音素材の特徴を生かし、我が国の伝統音楽を手掛かりとしながらグループでリズムアンサンブルをつくっていく。小学校の約束事に加え、同時に重なる音を増やすことで、音と音の関わり合いや強弱、速度の変化にも着目できるようにする。

(1) **旋律をつくる学習A** 題材名「拍の流れにのろう」(小学校第4学年)

<題材目標>・8分の6拍子の拍の流れを聴き取り、そのよさや面白さを感じ取って、短い旋律をつくったり、曲想にふさわしい表現を工夫して思いや意図をもって歌ったりする能力を育てる。
・8分の6拍子の楽曲の醸し出す曲想を感じ取り、そのよさを言葉で表す等して味わって聴く力を育てる。

² 坪能由紀子『音楽づくりの授業アイデア集 音楽をつくる・音楽を聴く』音楽之友社 2012年 p.24

³ <単調な低音><うなる音>の意。最低声部で奏される持続音、およびこの種の音を奏するために用いられる楽器や楽器の低音弦、低音管をさす。

<学習指導要領との関連> 「A表現・(1)歌唱」イ 「A表現・(3)創作」アイ 「B鑑賞・(1)」アウ
 <ポイントとなる〔共通事項〕> ア (ア) 拍の流れ、フレーズ (イ) 問いと答え イ 8分の6拍子
 <教材> ①風のメロディー ②せんりつづくり
 ③「パール ギュント」第1組曲から 「朝の気分」 /E. Grieg 作曲

<指導計画> 太枠内は「音楽づくり」に関わる学習

時	ねらい	おもな学習活動	教材
1	○ 8分の6拍子の特徴を感じ取って、曲想にふさわしい表現で歌ったり音楽をつくったりする学習に進んで取り組もうとする。	第一次 8分の6拍子の拍の流れを感じ取って表現する。 ・ 8分の6拍子について確認し、「風のメロディー」に合わせて、拍打ちや旋律のリズム打ちをして拍の流れを感じ取る。 ・ 旋律をつくる約束事を確認する。 ・ ペアで役割を交代しながらリコーダーを用い「問いと答え」の音楽のやりとりを楽しむ。 ア【活動中の様子の観察・発言内容】	②①
2	○ 「問いと答え」の仕組みを生かし、まとまりのある8分の6拍子の旋律にするために試行錯誤し、どのように音楽をつくるかについて思いや意図をもち、旋律をつくる。	・ めあてや活動の流れ、旋律をつくる約束事を確認し、どんな旋律をつくるか(音の選び方、終わり方、リズムの選び方等)を考える。 ・ 各自で「問いと答え」の仕組みを使ってまとまりのある音楽をつくる。 ・ つくった旋律の工夫したところ、お気に入りの部分について等をワークシートに記録し感想交流する。 イ【発言内容・ワークシートの記述内容・演奏の聴取】 ウ【作品・演奏の聴取】	↓
		・ 前時につくった旋律を、クラス全体の前で、4人ずつそれぞれ発表する。楽器はリコーダーを用い、録音した伴奏のパターンに合わせる。	
3	○ 8分の6拍子を聴き取り、そのよさを感じ取り、曲想にふさわしい歌い方を工夫し、どのように歌うかについて、思いや意図をもつ。	第二次 8分の6拍子の拍の流れにのり、曲想にふさわしい表現を工夫したり、聴いたりする。 ・ 「風のメロディー」の旋律の音の動きや曲の山等に気付いて歌う。 ・ 3段目から4段目の歌い方を友達と話し合い、試しながら表現を工夫する。 ・ 活動を振り返り、次時に生かすため、気付いたことや話し合ったことをワークシートにまとめ、どのように歌うか思いや意図をもつ。 イ【発言内容・ワークシートの記述内容・観察】	
4	○ 8分の6拍子の流れにのり、曲想にふさわしい表現で歌う。	・ 前時に記述したワークシートをもとに「風のメロディー」の3段目から4段目のブレス、音の長さ強弱等を楽譜で確かめながら歌う。 ・ 息の使い方や発音、発声の仕方等についても意識し、拍の流れにのってフレーズを感じ取りながら歌う。 ウ【演奏の聴取】	↓
5	○ 楽曲全体にわたる曲想とその変化に着目し、8分の6拍子の特徴を感じ取って聴く。	・ 「朝の気分」を聴き、感じ取ったことや聴き取ったことを言葉で表現する。 ・ 体を動かしながら聴き、8分の6拍子のゆったりとした拍子感に気付く。 ・ フレーズのまとまりや曲想の変化に着目しながら、楽曲全体を聴き味わう。 ・ 「朝の気分」の紹介文を書く。 エ【発言内容・ワークシートの記述内容】	③

① 「音楽づくり」「創作」に至るまでの仕掛け

本題材では、「音楽づくり」に入る前に、歌唱教材「風のメロディー」を8分の6拍子の拍の流れにのって歌唱する学習を位置付けた。また、6拍を3拍ごとのまとまりとして視覚的にも捉えられるように、図を用いて説明した。

この活動を通して、拍のまとまりを感じる事ができ、音楽の縦が揃い、揺れるような8分の6拍子の感覚をつかんでいくことができた。これらの活動は、「音楽づくり」に至る準備段階として有効な手段であった。

② 音楽的な約束事の提示 (本検証授業では「旋律をつくる約束事」と表記)

「音楽づくり」を行う上で、児童が音楽の仕組みや音楽的な約束事を理解していることは前提である。教師が一方的に「これが『問いと答え』です。」と説

旋律をつくる約束事

第1時	その1：ソラシの音を使う。 その2：1人が問い、もう1人が答えの形で終わらせる。 その3：8分の6拍子でつくる。 その4：4小節分の長さにする。
第2時	その1：ソラシの音を使う。 その2：問いに対して、答えで終わらせる。 その3：8分の6拍子でつくる。 その4：4小節分の長さにする。

図4 第1時と第2時で示した旋律をつくる約束事

明するのではなく、活動から約束事の理解につなげたいと考えた。第1時では「旋律をつくる約束事」(図4)を確認する場面が重要となるため、以下の3つのステップに分けて示した。

<p>ステップ1</p> <p>教師が2小節分の旋律を先行して演奏し、児童全員がそれを反復するという活動をする。この活動を通して「ソラシ」の3音だけでつくることに気付く。</p>	<p>ステップ2</p> <p>一人の児童が即興演奏する旋律を、他の児童が反復するという活動を順番に行い、リレー奏する。この活動を通して8分の6拍子の拍の流れを感じ取り、即興的な演奏の仕方を体験する。</p>	<p>ステップ3</p> <p>児童が吹く「問い」の旋律に、教師が「答え」となる旋律を即興で吹いて例示する。この活動を通して「問いと答え」のやりとりの仕方に気付くとともに、「問い」の旋律の音を少し変えるだけでも「答え」になることに気付く。</p>
--	---	--

ここでの「問いと答え」のやりとりは、実際につくる4小節分になることを知り、旋律をつくる見通しをもつことにもつながった。その後教師は『「元気ですか?」』『「元気ですよ。」』みたいな感じね。そういうのはお話だけじゃなくて、音楽でもやることのできるの。』と児童がイメージしやすい平易な言葉で補足することにより、多数の児童が「問いと答え」の仕組みや「問い」に対する「答え方」をどう工夫するとよいのかを理解し、ねらいをはっきりと捉えさせることができた。

③工夫のポイントを明確にするための発問や投げ掛けの工夫

第2時では、第1時にペアでつくった問いと答えの旋律の中から2つのペアの作品を取り上げて示し、工夫のポイントに気付かせていく。今回の「音楽づくり」では、工夫するポイントを「まねっこ」「しりとり」「のんびりリズム」「細かいリズム」の4点に絞ることとした(図5)。ここで児童が工夫のポイントに気付くことは、「問いの終わりの部分は音楽がつながっていく感じになるように、「しりとり」を使おう。」というように、作品を構成していくための見通しをもつことにつながると考えた。

(音の選び方に関するポイント)	
まねっこ	・・・反復を使う。
しりとり	・・・問いの終わりの音と同じ音から答えの旋律を始める。
(リズムの選び方に関するポイント)	
のんびりリズム	・・・4分音符や付点4分音符を多く使う。
細かいリズム	・・・8分音符を多く使う。

図5 工夫のポイント

タイプの違う(図6)と(図7)の旋律を比べる場面では、児童は工夫のポイントに気付くだけでなく、音楽を形づくっている要素がもたらす効果についても感じ取ることができた(図8)。

図6 「まねっこ」「のんびりリズム」に気付かせるための児童の作品例

図7 「細かいリズム」に気付かせるための児童の作品例

児童はこのような学習モデルを見ることによって、自分がつくろうとしている音楽への思いをもつことができた。

④和音による伴奏

第2時では、和音による伴奏①(I→VI→II V→I)②(I→V→V V→I)の2種類と、第1時で流したリズム伴奏③を使用した(図9)。4小節を1フレーズとする和音の伴奏を聴きながらつくることで音楽のまとまりを捉え、旋律をつくるための見通しをもつことができると考えた。ただし、児童は本題材までに和音についての学習を経験していないため、和音にふさわしい旋律づくりを求めることはしない。あくまでも和音は発想を促す手掛かり、音楽のイメージを補うものとして考え、どの伴奏を選ぶかは児童の判断に任せることとした。

教師：どんな工夫がされているのか見付けてみてね。
児童1：あれ? だいぶ違う。
児童2：伸ばしが1回しかない。
児童3：3つの音を集中させているところがある。
教師：「ソソソソソ」で使っているとどんな感じがする?
児童4：走ってるみたい。

図8 「細かいリズム」に気付く場面のやりとり

児童の作品（図 10）を見ると、①の和音に合う旋律をつくった児童が多く、②の和音を選んでいても①の和音に合う旋律をつくった児童も見られた。和音の響きを聴き分ける力が備わっていない児童にとっては、2種類の和音伴奏があることよき気付くことが難しいように思われた。しかし、「拍の流れにのって」という題材目標に立ち返れば、無機的なリズム伴奏に比べ、和音による伴奏があることで音を聴いて合わせようという意識がより強く働き、フレーズ感を捉えられたことは児童の様子から明らかであった。和音による伴奏を発想をふくらませる手掛かりとするためには、むしろ①の和声のみで伴奏を分散和音の形にしたり、音色を変えたりすることでも、個々の感受の違いからさらに期待される効果が得られる可能性があるかと推測される。

図 9 第2時で使用した和音伴奏とリズム伴奏

図 10 完成した作品とそこに至るまでの活動の様子

⑤協同的な学習の場面の設定

第1時、ペアで問いと答えの旋律をつくる場面では、各自で考えた「問い」のアイデアをもとに話し合ったり、リコーダーを吹いて試したりする活動を設定した。

（図 11）は、第1時におけるあるペアの7分間程度の学習の場面の様子である。児童8は「器楽」「音楽づくり」共に技能的にやや不安があるが、児童9とのペアで学

<p>児童8：何か吹いてみるね。「ソーラ シーラ ソー ラー」 児童9：ああ、「ソーラ シーラ ソー ラー」？ 児童8：（うんうんとうなずく） 児童9：「ソーシ ソシラ ソー ー」 児童8：「ソーシ ソシラ ソー ー」</p>	<p>※1 互いに2小節の旋律を真似している。</p>
<p>児童9：う～ん、どうする？じゃあ、伸ばし棒入れないでやってみる？ 「ソラシ ソラシ ソラシ ソラ・」（階名唱して提案）とか。 児童8：「シソラ」（児童2の旋律を真似して練習している）「シラソ ラシラ」… 児童9：「ソラシ シラソ ラ」「ソラシ ラソラ ソラシ ラソー」</p>	<p>※2 細かいリズムを試している。</p>
<p>児童8：じゃあくり返すとかは？ 児童9：やってみて。 児童8：「シーラ ソー シーラ ソー」 児童9：いいじゃん。「シラソ シラソ シラソ ー」みたいな？ 児童8：うんうん。そっちの方がいい。 児童9：じゃあそうする？ 児童8：うん。まだこっち（答え）も考えなくちゃ。 児童9：じゃあ「ソラシ ソラシ ソラシ ー」（階名唱して）にする？ 児童8：いいよ。 児童8：問い：「シラソ シラソ シラソ ー」 答え：「ソラシ ソラシ ソラシ ー」</p>	<p>※3 リズムを変えた形で繰り返し方法を試している。</p>
<p>児童9：問い：「シラソ シラソ シラソ ー」 答え：「ソラシ ソラシ ソラシ ー」</p>	<p>※4 「問いと答え」の旋律を試している。</p>

図 11 ペアで「問いと答え」の旋律を即興的につくる場面

2 ・ 3	○8分の6拍子のリズムや旋律、テクスチャなどを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、音階の特徴を生かした音楽表現を工夫し、どのように旋律をつくるかについて思いや意図をもち、弱起の旋律をつくる。	<ul style="list-style-type: none"> ・「浜辺の歌」を参考にしながら、作品の構成について見通しをもつ。 ・前時の約束にさらに音が一音加わることや工夫のポイントを知り、音で確かめながら、創作する旋律のイメージをふくらませる。 ・一人で伴奏（I→II¹→I¹I→V→I→II¹→I²V→I）を手がかりとして旋律をつくる。 ・音のつながり方やリズムの選び方を工夫してつくっている作品の発表を聴き、その後の創作に生かす。 ・友達の作品の工夫のポイントに着目しながら聴き、そのよさを話し合い、共有する。 イ【観察・発言内容・ワークシートの記述内容】 ウ【作品・演奏の聴取】 	↓
4	○8分の6拍子のリズムや旋律、テクスチャなどを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、音楽を形づくっている要素や構造と曲想の関わりを理解して、解釈したり価値を考えたりし、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わって聴く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ABA'の形式であることを確認し、楽譜を見ながら、旋律や伴奏の形の特徴から知覚感受したことをグループや全体で話し合う。 ・旋律や伴奏の特徴について気付いたことや感じ取ったことを、自分なりの考えを交え、紹介文に書く。 エ【発言内容・ワークシートの記述内容】 	③

①「音楽づくり」「創作」に至るまでの仕掛け

「Piacere d' amor」は、生徒が発声練習のために中学校入学時からほぼ毎時間歌い慣れてきた楽曲、「浜辺の歌」は既習曲である。2曲の旋律がすぐに生徒の頭に浮かぶことは、創作の大きな手掛かりとなる。そこで、授業の中で歌ったり、旋律部分（冒頭から8小節）を朝自習の時間を使って写譜したりする活動を続けるようにした。これらの活動は、生徒が記譜の技能を身に付けるだけでなく、8分の6拍子に特徴的なリズムパターンを知ることにもつながった。また、創作のために新たな教材を学習して時間を割くことなく進められたことは、生徒と教師の双方にとって有効であった。

②音楽的な約束事の提示（本検証授業では「旋律創作のルール」と表記）

2曲の冒頭部分の拡大譜を見ながら既習曲として歌唱し、拍子、速度、調、伴奏、弱起（授業ではアウフタクトという言葉を用いた）による旋律の始まり方に着目して感じ取ったことをまとめる活動を設定した。そして、この2曲の特徴を旋律創作のルール（図13）とした。生徒にとって聴き慣れた曲であるが、改めて音楽の要素の一つ一つに気付かせていく活動を通して、旋律創作のルールを音で理解させていくことができた。

旋律創作のルール	
第1時	①アウフタクト（ド→ファ）、（ド→ド）または（ド→ラ）で始める。 ②ド ファソラ の音でつくる。 ③8分の6拍子、4小節（一人2小節ずつ）で終わる。
第2時	①アウフタクト（ド→ファ）、（ド→ド）、（ド→ラ）または（ド→ラ）で始める。 ②ド ファソラ ド の音でつくる。 ③ 一人で 8分の6拍子、 8小節 で終わるようにつくる。 （ 太字 は第2時で新たに示したルール）

図13 第1時と第2時で示した旋律創作のルール

③工夫のポイントを明確にするための発問や投げ掛けの工夫

第1時では、2小節ずつの「問いと答え」の旋律をペアでつくる協同的な活動を位置付け、次に個人で8小節（a a'）の旋律づくりをする時の

音の選び方に関するポイント <ul style="list-style-type: none"> ・ a a' の形 ・ 跳躍する音 	リズムの選び方に関するポイント <ul style="list-style-type: none"> ・ のばす、きざむ、付点のリズム
--	--

図14 工夫のポイント

仕組みを理解させた。第2時では、工夫のポイントを3点（図14）に絞って提示し、音で確認しながら気付かせたり、リズム打ち（図15）の活動を取り入れたりした。

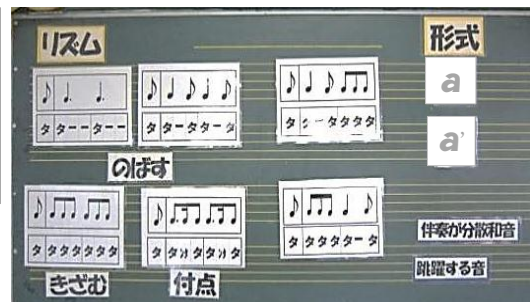


図15 提示したリズムカード

創作途中の段階では、効果的な工夫をしている生徒の作品を聴く場面を設定した。この場面では、ど

のような思いをもち、どのように工夫しているのか、その結果どんな旋律ができたのかが分かるよう、作品1（図16）を紹介した。演奏後、教師は「こういう技も参考にしているからね。」と声を掛けたところ、「友達の作品を聴きa'が高い方のドから始まっているのがきれいだと思ったから、自分の作品にも取り入れてみようと思った。」とワークシートに記述する生徒や同じ手法を使った作品が多く見られた。跳躍する音については、「このおしゃれな感じがする音程の使い方でも個性が出るよね。」と教師が投げ掛けたことで、特別な音の選び方であることを生徒に印象付けた。ワークシートには「一部跳躍する音を入れて、そこが目立つようにした。」「aとa'の違いを出すために跳躍する音を入れた。」等、跳躍進行を選んだ生徒の意図がうかがえる記述が見られた。

工夫のポイントとして8分の6拍子に特徴的なリズムカードを提示したことは、生徒がつくる場面、記譜する場面での大きな手掛かりとなったことは確かである。しかし、提示されたリズムを何種類も組み合わせることで、かえって複雑なリズムになり、まとまりを欠いた作品になることもあった。

そこで、紹介したのが作品2（図17）である。作品1と同様、そこからよさを感じ取って自分の作品に生かした生徒は、「リズムを一定にすることで(自分も)全体的な統一感を生むことができたと思う。」とワークシートに記述し、まとまりの感じられる旋律を創作していた。このことから、教師が工夫のポイントを説明するだけでなく、創作した作品や思いを適切なタイミングで紹介することで生徒の発想がふくらみ、一人一人が作品への思いや意図をもつことにつながるといことが分かった。

作品1

生徒1の思い
軽やかで流れるような旋律をイメージしました。細かい音も取り入れました。

工夫したこと
軽やかさを出すために、細かい音を少し取り入れました。そして、細かい音の後にのばす音を入れて、なめらかで流れるような旋律にしました。また、跳躍も少し入れました。

図16 5小節目アウフタクトの音の選び方に工夫が見られる作品

作品2

生徒2の思い
分散和音なので、流れるようなゆったりとした旋律を創作したいと思いました。

工夫したこと
リズムを一度も変化させず、伸ばす音を多くしました。また、音が上がれば音を下げると終わりを感じさせるような工夫をしました。さらに一度跳躍する音を加え、違った雰囲気を感じさせるようにしました。

図17 同じリズムパターンを繰り返し使う工夫をした作品

④和音による伴奏

伴奏は「浜辺の歌」の和声進行（I → II¹ → I¹ I → V → I → II¹ → I² V → I）をもとにし、分散和音で演奏することとした。和音の構成音を楽譜上で示してそこから音を選ぶのではなく、創作中はCDに録音した伴奏を流しておき、聴いた音を手掛かりに旋律を創作していくこととした。

生徒は伴奏に合う旋律をキーボードでつくることに関しては未経験であった。そのため、最初から伴奏を聴きながら音を探す生徒は決して多くはなかった。大半の生徒はまず旋律をつくることで精一杯だったからである。しかし、繰り返し流れる伴奏を聴きながら創作していたためか、全ての和音にふさわしい旋律とまではいかないまでも、最終的には和音を意識しながらつくっている旋律が多く見られた。

⑤共有や振り返りの場の設定

完成した作品は、4人の小グループ内でローテーションをして発表し合う。演奏が技能的に難しいという生徒については、教師や同じグループの生徒が代わりに演奏してよいこととした。

発表会では、生徒の思いや意図を音楽から汲み取れるよう「友達の作品のよいところを見付けたり、『こういう工夫が見えた。』ということ伝えたりしましょう。」と指導した。どのグループでも互いの作品に関心をもって聴き合う姿が見られた。作品を聴いた後には「伴奏が分散和音で、それに合うように流れるようなリズムの曲だったのでいいと思った。」「aとa'で旋律のリズムは同じだけど、音の高さを変えることによって雰囲気がガラッと変わる感じがして、曲の面白みが増すと思った。」といった感想が聞かれた。aとa'のまとまり、音やリズムの選び方、伴奏と旋律の重なり等、生徒自身が創作の場面で意識してきた音楽の要素を、友達の作品から聴き取り、そのよさを共有することにつながった。ただ、残念ながら演奏するだけで終わってしまったグループもあり、視点をもった聴き方をさせることについては課題が残った。

⑥「小組曲より『I. 小舟にて』」の鑑賞との関連

「創作」の学習の後は鑑賞の学習を位置付けた。ここでは生徒が創作した作品と同様の音楽の要素を含む「小組曲より『I. 小舟にて』(ドビュッシー作曲)」を選曲した。

鑑賞の学習の中でも生徒は分散和音の伴奏や旋律の特徴に気付き、揺れるような8分の6拍子、さらに旋律と伴奏が一体化した美しさを聴き味わう姿が見られ、創作で学習したことの意味を再認識させることができた(図18)。

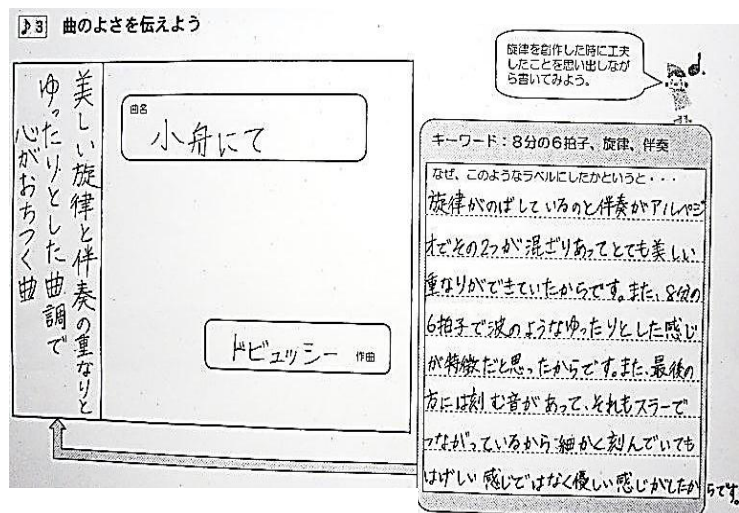


図18 「小舟にて」の鑑賞の学習でのワークシート

(3) 構成を工夫して音楽をつくる学習A 題材名「音でお話しよう」(小学校第2学年)

<p>< 題材目標 ></p> <ul style="list-style-type: none"> 音素材の特徴や問いと答えの仕組みを生かし、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、簡単な音楽をつくる能力を育成する。 音素材の特徴や問いと答え等の仕組みを聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、音楽を形づくっている要素の関わりを感じ取って聴く力を育てる。 <p>< 学習指導要領との関連 > 「A表現・(3)音楽づくり」イ 「B鑑賞・(1)」イ</p> <p>< ポイントとなる【共通事項】 > ア(ア)音色 (イ) 問いと答え</p> <p>< 教材 ></p> <table border="0"> <tr> <td>①「Oro」/ナイジェリアの音楽</td> <td>②「木片の音楽」/ S. Reich 作曲</td> </tr> <tr> <td>③「風のリズム構造I」/R. Tudón 作曲</td> <td>④「こすりんぐ」/坪能克裕作曲</td> </tr> <tr> <td>⑤「Rock Trap」/W. J. Schinstine 作曲</td> <td></td> </tr> </table>	①「Oro」/ナイジェリアの音楽	②「木片の音楽」/ S. Reich 作曲	③「風のリズム構造I」/R. Tudón 作曲	④「こすりんぐ」/坪能克裕作曲	⑤「Rock Trap」/W. J. Schinstine 作曲	
①「Oro」/ナイジェリアの音楽	②「木片の音楽」/ S. Reich 作曲					
③「風のリズム構造I」/R. Tudón 作曲	④「こすりんぐ」/坪能克裕作曲					
⑤「Rock Trap」/W. J. Schinstine 作曲						

< 指導計画 > A 太枠内は「音楽づくり」に関わる学習

時	ねらい	おもな学習活動	教材
1	○音楽の仕組みや音を音楽にしていくことに興味・関心をもち、思いや意図をもって簡単な音楽をつくる活動に進んで取り組もうとする。	<ul style="list-style-type: none"> 「Oro」の一部を聴き、問いと答えの音楽のイメージをつかむ。 問いと答えの音楽をつくるために、身近な打楽器からお気に入りの音や奏法を探し、「打つ」「振る」「こする」の3種類の奏法があることを知る。 見つけた音をリレー奏で紹介する。 「木片の音楽」「風のリズム構造I」「こすりんぐ」の一部を聴き、様々な楽曲でも「打つ」「振る」「こする」奏法で演奏されていることを知る。 身近な素材からもお気に入りの音を探し、リレー奏をして音遊びを楽しむ。 <p style="text-align: right;">ア【活動の様子の観察・発言内容】</p>	<p>①</p> <p>②</p> <p>③</p> <p>④</p>

2	<p>○問いと答えの仕組みを生かし、音を音楽にしていけることをいろいろと試して、自分の考えや願いをもって簡単な音楽をつくる工夫をする。</p> <p>○問いと答えの仕組みを生かし、音を音楽にする。</p>	<p>・前時に選んだ音で、問いと答えのやりとりを楽しむ。</p> <p>・4人1グループで、問いと答えの音楽をつくる。</p> <p>・グループで終わり方を工夫し、問いと答えの音楽を完成させる。</p> <p>イ【発言内容・ワークシートの記述内容・活動の観察】 ウ【作品・演奏の聴取】</p>	
		<p>・教師によるモデルとなる作品の演奏を聴いて、工夫のポイントに気づく。</p> <p>・発表の前にグループの作品の構成について再確認する。</p> <p>・各グループの作品の発表を聴き、友だちの作品の中から、問いと答えの仕組みを生かした音楽の面白さに気付く。</p>	
3	<p>○音色や問いと答えの音楽の仕組みに気付いて、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取って聴く。</p>	<p>・「Rock Trap」を視聴し、音色の面白さや問いと答え等の音楽の仕組みに気付いて聴く。</p> <p>・全体を通して「Rock Trap」を視聴し、面白いと感じるところやその理由について、ワークシートにまとめる。</p> <p>エ【発言内容・ワークシートの記述内容】</p>	④

①「音楽づくり」「創作」に至るまでの仕掛け

導入では「音でお話をする」ということを教師の言葉による説明ではなく、音楽から確認するため「0ro/ナイジェリアの音楽」を聴くこととした。その後、「友達とお話するための音を探しましょう。」と指示し、お気に入りの音探しの活動を設定した。

音素材として用意したのは、小物打楽器に加え、身の回りの音素材として貝殻、小瓶、ドングリ、小豆、クリップ等である。最初は一人一人が小物打楽器から、その後はグループで身の回りの音素材から一つずつお気に入りの音を探すこととした。

見付けたお気に入りの音が自分にとって価値のある大切な音となり、次時の学習「音でお話する音楽をつくる」への意欲付けにもなった。

②音楽的な約束事の提示（本検証授業では「音楽のつくりかた」と表記）

第1時は、お気に入りの音を選んだ後に、一人一人が順番に音を紹介するためリレー奏を、第2時はまねっこ等の音遊びをすることとした。この音遊びの活動で示された仕組みが約束事（図19）となる。そのため、イラストや児童が理解しやすい言葉を使った掲示物でも確認し、構成する際は「じゅんばんりレー」から始め、3パターンを選ぶこととした。

グループ活動中は、友達と順番を考え音をつなぐ児童、言葉を音に置き換えて会話する児童、音で会話することを楽しむ児童等、自由にリズムをつくり、音が音楽として構成されていく面白さを感じ取る様子が見られた。

③工夫のポイントを明確にするための発問や投げ掛けの工夫

第3時には、児童に提示した約束事と同じ条件でつくったモデル作品（図20）を教師が演奏した。「終わり方」を工夫のポイントとするため、最後は「いっしょ」を2回繰り返して終わるようにし、非拍節的な部分や強弱の変化も含む音楽とし

約束事（音楽のつくりかた）	
その1：	うつ、ふる、こする 音をつかう。
その2：	じゅんばんりレー、はんたいりレー、まねっこ、おはなし、いっしょ（※）からえらぶ。
（※）	
じゅんばんりレー	…各自が好きなリズムを順に演奏する。
はんたいりレー	…「じゅんばんりレー」の反対の順で演奏する。
まねっこ	…児童aのリズムを、児童bが同じリズムで演奏する。
おはなし	…児童aのリズムに対して、児童bが違うリズムで答える。
いっしょ	…児童aのリズムに対して、それとは違うリズムを児童b, c, dが揃って演奏する。
工夫のポイント	おわりかた

図19 第2時で示した音楽をつくる約束事と工夫のポイント

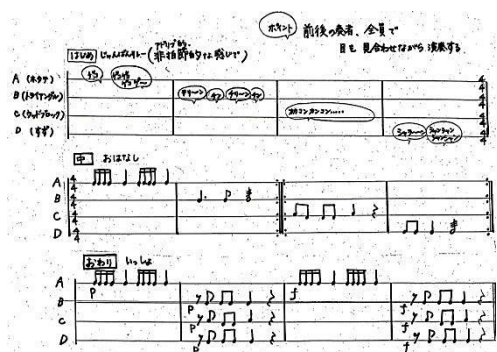


図20 児童に提示した約束事と同じ条件でつくったモデル作品

た。教師は、音楽の構成として何を使っていたか、誰がどの順番で演奏していたか等の発問をし、児童が聴き取ったことを全体の場で共有した。

ここで強弱や終わり方に着目したことで、工夫のポイントを意識した作品をつくることにつながった。

④ワークシートの工夫

グループでの活動が円滑に進むよう、ホワイトボードにカードを貼りながら音楽をつくっていきけるようにした(図21)。ボードの書き方は特に指定せず、必要なことをメモしてもよいこととした。

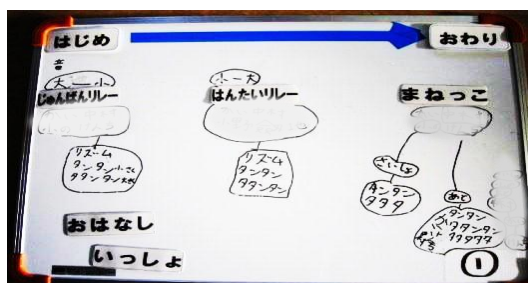


図 21 グループ活動時に使用したボード

児童 12: おわりがおわりっぽくなる音がくがいいと思いました。「おわり」みたいな「タタタン」というふうにくふうしてみました。

児童 13: さいごにみんないっしょでおわらせたいと思いました。だから いっしょをさいごにしました。

児童 14: たのしくじゅんばんのある音がくにしたいと思いました。だから 小さいから大きくなったり、さいごはみんなで合わせたりしました。

(_____ は「どんな音楽をつくりたいと思ったか」
..... は「そのためにどんな工夫をしたのか」の質問への記入)

図 22 「音楽づくり」のワークシートの記述

ボードの記録から、児童は全体の構成を決めた後、誰が、どんなリズムで演奏するのか、強弱や終わり方はどうするのかを相談し、工夫していたことが分かる。一人一人の考えや願いはワークシートから見取ることとした。「どんな音楽をつくりたいと思ったか」「そのためにどんな工夫をしたのか」と二つの項目に分けて質問したことで、つくりたい音楽への思いと、そのために工夫したことが結び付いた記述となった(図22)。

⑤協同的な学習の場面の設定

音楽をつくる人数は4人とし、第1時の音探しから同じメンバーで活動できるようにしてきた。

(図23)は、教師による演奏を聴き、自分たちも強弱の変化を付けて工夫しようと試している場面である。(児童15)は、それぞれの楽器の音量の特性に気付き、音量が小さい順に演奏しようと提案している。

(児童16、児童17)もそれに同意し、全員が音量の違いを意識しながら音楽をつくっている様子が分かる。小学校2年生の発達の段階から考えるとグループ活動は少人数が適している。しかし、人数が少ないと じゅんばんりレー、おはなし等の区別がつきにくくなり、構成の違いを捉えづらくなることも分かった。児童の実態やつくる音楽の構成に即した人数編成を検討する必要がある。

児童 15: 児童 17 さんは **中くらいの音**でしょ。うちは **一番大きい音**でしょ。児童 12 さんは **一番小さい音**だから、それで「何して遊ぶ」って児童 16 さんがやるじゃん。 **そこを一番小さい声で**。

児童 16: そうだ。

児童 15: それで児童 17 さんがやって、それで私がやって。

児童 16: (ボードに書き込む)

児童 16: それ、いいね。

児童 15: じゃあ最初から。

児童 16: いくよ。

全 員: (演奏する)

児童 16: もうちょっと上で。

児童 16: **ちょっと小さくしてみる**。

全 員: (演奏する)

児童 16: **少し大きく**。

児童 17: (演奏する)

児童 15: 児童 17 よりも **音量を上げて演奏する**。(1名は欠席)

図 23 強弱について話しながら試している場面

⑥共有や振り返りの場の設定

第3時は各グループの作品を全員で聴き合う活動を設定した。児童は、どんな構成で音楽がつくられているのかに着目して聴き取っていたが、構成に着目しすぎるあまり、「おはなしを使っていたと思います。」「合っています。」といったコメントが多くなってしまった。その構成がどのような効果をもたらしていたのかにも気付かせる発問をする必要があった。

⑦「Rock Trap」の鑑賞との関連

発表会の後は、ボディパーカッション「Rock Trap」の演奏を視聴し、身体を叩いて出る音という音

素材の価値や、「問いと答え」等の音楽の仕組みに気付かせ、楽曲の面白さを味わわせたいと考えた。

教師は「この曲にも始めや終わりがあるんだけど、何か気付いたことはありませんか？」と発問したことによって、児童はすぐに「音楽づくり」の学習を想起し、音楽の構成に着目しながら鑑賞する姿が見られた。音楽を形づくっている要素を聴き取り、感じ取ったことを、これまでに活動を通して学んできた言葉を用いて説明しようとしていた(図24)。「音楽づくり」と「鑑賞」の関連が、学習の深まりにつながった場面であった。

児童18: **まねっこ**がすごかったです。なみになっていてかつこいいなと思います。
 児童19: がつきじゃなくても**じゅんばんりレー**とかできるんだなあとおもいました。わたしもむずかしそうだけどやってみたいです。ほんとうにすごいとおもいました。
 児童20: みんなでたたいているところがかっこよかったです。なんでかという、音がそろったり大きくなったりしてたからです。

図24 「Rock Trap」で気に入ったところとその理由についての記述

(4) 構成を工夫して音楽をつくる学習B

題材名「手組^{てぐみ}や我が国の伝統音楽の特徴を生かしたリズム創作をしよう」(中学校第2学年)

<p><題材目標> ・音色、リズム(間)、構成などを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら聴く感性を養う。 ・我が国の伝統音楽における唱歌や手組に関心をもつとともに、音素材の特徴を生かし、全体のまとまりを生かした音楽を構成する能力を高める。</p> <p><学習指導要領との関連> 「A表現・(3)創作」イ 「B鑑賞」ア・イ</p> <p><ポイントとなる[共通事項]> 音色 リズム(間) テクスチャ 構成</p> <p><教材> ①大鼓、小鼓、締太鼓の手組 ②能「猩々『引込み』」 堅田 喜三久 構成曲 ③能「石橋」 「獅子 / 『乱序のカカリ(序奏)』『露之拍子』『出之乱序』『獅子之舞』」 ④「打破を願う」相場由紀子/作(絵①) ⑤「空とぶ舟」相場由紀子/作(絵②)</p>
--

<指導計画> 太枠内は「創作」に関わる学習

時	ねらい	おもな学習活動	教材
1	○我が国の伝統音楽における唱歌や手組に関心を持ち、音素材を生かして手組をつくる学習に主体的に取り組もうとする。	<ul style="list-style-type: none"> 唱歌や手組について知る。 手組をつくる手掛かりとなる2枚の絵を見て発想をふくらませ手組をつくる。 <p>ア【活動の様子の観察・発言内容・ワークシートの記述内容】</p>	⑤④①
2	○音色、リズム(間)、テクスチャ、構成などを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、手組や音素材の特徴を生かし、全体のまとまりを工夫し、どのように音楽をつくるかについて思いや意図をもつ。	<ul style="list-style-type: none"> 音楽を構成するためのルールに気付く。 ルールに従って、グループで手組を構成する。 「猩々『引込み』」を聴き、工夫のポイントに気付く。 グループで工夫しながら音楽を構成していく。 他のグループの作品から創作のヒントに気付く。 つくった作品に対する思いや意図をワークシートに記入する。 <p>イ【観察・発言内容・ワークシートの記述内容】 ウ【作品・演奏の聴取】</p>	②
3	○音素材の特徴を生かした手組を構成し、全体のまとまりを生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けて音楽をつくる。	<ul style="list-style-type: none"> 創作した作品を演奏し、そのよさを話し合い、共有する。 	
4	○音色、リズム(間)、テクスチャ、構成などを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、能楽囃子の特徴を物語と関連付けて理解し、根拠をもって批評して、音楽のよさや美しさを味わって聴く。	<ul style="list-style-type: none"> 能「石橋」の簡単なあらすじや能楽について知る。 創作のルールや工夫のポイントを思い出しながら「獅子」を聴く。 掛け声やリズム(間)、強弱や速度の変化について、知覚感受したことをメモし、グループや全体で話し合う。 全体を通して聴き「獅子」のどんなところに面白さを感じるか、自分の考えをワークシートにまとめる。 <p>エ【発言内容・ワークシートの記述内容】</p>	③

4 日本音楽の用語。能や長唄などの打楽器のリズムパターン。粒(打音)と掛け声からなる。

①「音楽づくり」「創作」に至るまでの仕掛け

題材の導入部分に、我が国の伝統音楽における四拍子^{しびょうし}の手組を聴き、そのリズムが唱歌^{しょうが}によって表されることを知る活動を位置付けた(図25)。次に、一人一人がモチーフとなる手組をつ

大鼓「チョチョ スチョ チョン」
小鼓「ボン タポ タッ ポン タタ スト トン」
締太鼓「テレ ック テレ ック スッ テンテン」

図25 生徒に例示した手組の唱歌

くるため、まず教師がつくり方の例を示す。ここでは、提示した物自体から発せられる音を連想する「効果音づくり」に陥らないよう、それ自体からは音が出ない羽根を見せ、質感を手掛かりとした唱歌「フーン フーン フワ フワ ドフッ ボッ」を例示する。さらにその手組を打楽器で演奏してみせる。本題材で使用する楽器は、学校で比較的十分な数が揃い、効果音として捉えにくい打楽器、(サスペンデッドシンバル、コンガ、ボンゴ、トライアングル、クラベス等)とした。

その後、生徒一人一人が手組の唱歌をつくる。ここでは、手掛かりとするため、2枚の抽象絵画を提示した。「空気感や広がりを感じてほしい」という作者の思いが込められた作品であるが、ここでは絵のタイトルや作者の思いは伝えない。作品を間近で見たり触れたりすることで、形や色彩、素材等の特徴を感じさせ、手組の唱歌をつくる時の発想につなげようと考えた。絵は全体的に見ても、部分的に見てもよく、(絵①)(絵②)それぞれについて各生徒が手組をつくることとした。

第1時に生徒がつくった手組は「シュー ドゴドゴドゴドゴ サー」や「シャッ シュー チョッ スチョン テク トントントン」(絵①から)等である。同じ絵を見ても、様々な言葉のリズムが生まれた。また、「トコトコ」と「ドコドコ」は同じリズムであるが、濁点の有無によって音色が違う等、ニュアンスを意識する生徒も見られた。これらの活動は生徒の発想の源となり、内面にある思いが音楽の要素と結び付き、音楽を生み出すために有効であった。

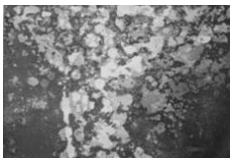
②音楽的な約束事の提示(本検証授業では「創作のルール」と表記)

創作の活動は6人グループの編成とし、各自でつくった手組を生かして構成できるよう、(図26)のような創作のルールを示した。作品は(絵①)→(絵②)の流れで構成する。(絵①)では手組を「重ねる」とし、(絵②)では「ドローン」か「問いと答え」を選ぶこととした。これらのルールは、各班の班長によって構成されたモデルチームが「重ねる」「ドローン」「問いと答え」を使った簡単なアンサンブル(教師が用意しておく)を演奏して示し、生徒が音や掲示物から創作のルールを理解できるようにした。

音で聴かせた後に図式化した音楽の構成を掲示物で示したところ、構成について正しく捉えることができていた。手組を構成していく場面では「音の高さの順や強さの順で重ね方を変えてみよう。」「音色が似ている楽器同士で組み合わせてみたらどうだろう。」「楽器の数を増やしたり減らしたりしてみたい。」等と話し合い、試すグループが見られた。ルールを

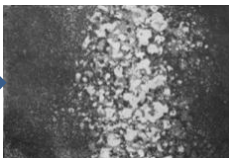
創作のルール

・(絵①)「重ねる」



重ねる

①									
②									
③									
④									
⑤									



ドローン

①									
②									
③									

問いと答え

①									
②									
③									

・掛け声、間(ま)を入れる。

工夫のポイント

始め方、終わり方を工夫する。
だんだん、または突然、強弱や速度を変化させる。

図26 手組をつくる手掛かりとするために示した絵画と創作のルール、工夫のポイント

5 能・狂言に使われる笛(能管)。小鼓・大鼓・太鼓という4種類の囃子(器楽)のこと。

6 しょうが。日本伝統楽器の教習で行われる一種のソルミゼーション。楽器の音色や技法を象徴する意味のない音節を歌唱して、旋律、リズム、技法を体得する。

最小限にしたことが、実際に音に出して試しながらつくる活動につながり、生徒の発想をふくらませることになった。

③工夫のポイントを明確にするための発問や投げ掛けの工夫

第3時には、構成した音楽をグループでさらに工夫していくため、能「猩々」から「引込み」を聴き、音楽の特徴について気付いたことを話し合う時間を設定した。音楽から聴き取った「掛け声」や「間」は創作のルールとして付け加え、**始め方**、**終わり方**を工夫する、**だんだん**、または**突然**、**強弱**や**速度**を変化させることを工夫のポイントとして提示した。「音楽がどう流れ、最後はどのように終わらせたのか。だからこう工夫する。」と、作品全体を見通した上で生徒の意図が表れるようにしたいと考え、発問や投げ掛けを工夫した。

「猩々『引込み』」を聴く場面では、「楽器以外に聞こえたものは?」「音楽の特徴として気付いたことは?」と発問することで、「掛け声」や速度の変化に気付くことができた。ここでは、音楽を聴いて気付いたことをそのまま創作に生かすように伝えるのではなく、「合唱の時にもいろんな工夫をしてきたよね。」「だんだん速くして行って、その先どう表現するのかということも考えたよね。」と、これまでの経験を想起させるような投げ掛けも行った。このことが、生徒に工夫のポイントを理解させることにつながった。

完成した作品は、一人一人がつくった8拍単位の手組を基に構成されていることが多かった。教師側から拍節の有無を指定したわけではないが、生徒が手組を合わせていくために、拍節感をもってつくっていったためと考える。しかし、始め方や終わり方を工夫するうちに、部分的に非拍節的などころが見られるようになり、我が国の伝統音楽に見られる「間」や漸次加速や減速をするリズム等の面白さを感じることもつながった。

④ワークシートの工夫

作品全体を見通せるよう、グループによる活動の場面では(図27)のグループ用シートを用いることとした。拍節的な音楽だけにとらわれないよう、工夫のポイントを書き込む欄は升目や線のない形にした。また、グループ活動の中で思いや意図を伝え合い、十分に音を試しながら活動できるよう、メモ程度の書き込みで済むようにした。

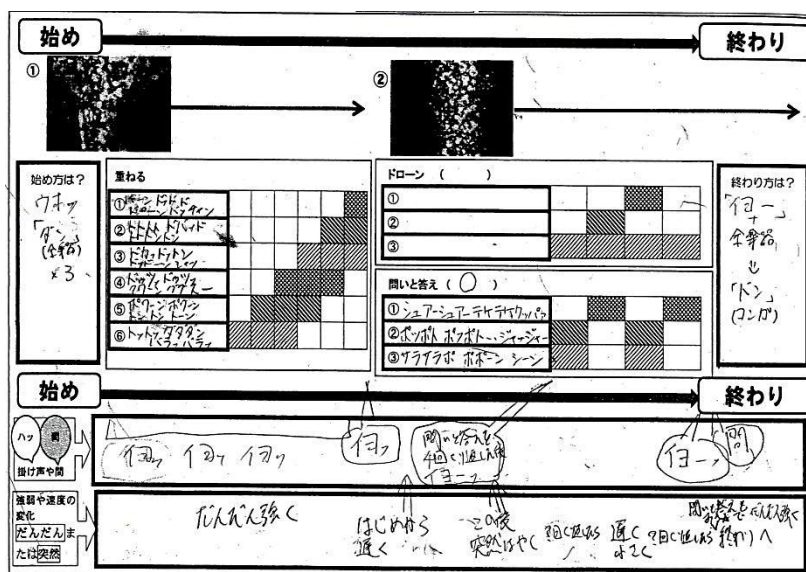


図27 第2時と第3時のグループ用シート

グループ用シートをあくまでも

創作のための補助的な扱いとして使用した結果、シートを完成させるためだけでなく、音楽を構成するために活発な言語活動を行う様子が多く見られた。

⑤協同的な学習の場面の設定

第3時では「猩々『引込み』」を聴いた後、グループで工夫する場面を設定した(図28)。このグループは(絵②)のドローンの部分でだんだん速くしていくという方向に意見がまとまっていくが、試してみるとなかなか合わないため、どこからテンポを上げていくかを再度確認している。(生徒5)は、テンポが変わるきっかけとして「掛け声」を入れることを提案し、やがて終わり方についてもどのように

生徒3：2回目、スピード上げるアンド音量上げる。
 生徒4：そこのベースによるんだよ。
 生徒5：でもさ、2回目じゃなくてもさ・・・
 生徒4：じゃあ、徐々に上げて。
 生徒5：徐々により、突然の方が聴き応えはない？
 生徒3：それか、また掛け声入れてから上げる。
 生徒4：じゃあ、ここ（生徒4）終わったら、突然上げよう？
 生徒5：1回目終わったら。
 生徒4：じゃあ、上げて。
 生徒5：速度は上げていくけど、音は、「パン」とかって。
2回目に入るとき、何か言って。「イヨッ！」でも。
 生徒3：いいよ。じゃあ、「重ねる」の最後からやるから。
 終わりまで少しテンポを上げながら試す。
 生徒5：え～分かんない。最後どうする？「タタタタン」が
めっちゃ大きくするとか...何か考えて。
 生徒3：上げて上げて、最後下げるみたいな。
 生徒4：あんまり分からないんじゃない？聴いてても。
 生徒5：じゃあ、最後・・・
 生徒4：スピードを激上げて。
 生徒5：上げてるんだけど・・・
 生徒4：生徒6（ギロ担当）がついてこれない。
 生徒5：じゃあ、こういうふうにするから、（速度）上げるから（みんなも）上げて。
 生徒6：うん。
 生徒3：じゃあ、また「重ねる」の最後から。
 生徒5：（生徒6に対して）最後は、ちっちゃく。
 生徒6：うんうん。
 生徒5：（全員に対して）ちっちゃくて速いのとちっちゃくて遅いのとどっちがいい？最後で、ちっちゃくて、速く終わるの？遅く終わるの？
 生徒3：速くていいんじゃない？遅いとなんか・・・
 （太字は音楽を形づくっている要素に関わる発言）

図 28 グループで速度や強弱について話し合っている場面

していくのかを考えている。このグループ活動を通して、ルールや工夫のポイントに沿って音楽を構成するだけでなく、我が国の伝統音楽の面白さにも触れ、「掛け声」や「間」を入れて作品の中で生かそうとしていたことが見取れる。

（図 29）は、この班でコンガを担当した（生徒5）のワークシート記述である。グループ活動の場では速度や強弱の変化のさせ方も工夫している。（生徒5）のワークシートには、始め方や掛け声の入れ方が記述されており、友達と話し合ったり音を試したりする中で、「何のために、どう工夫するのか」と、明確な自分の思いをもち、音楽を形づくっている要素の働きを感じ取りながら構成していたことが認められる。

始め方はコンガでドドドド（みんなでドン）と速くして、みんなで「ハッ」と言う。コンガで迫ってくる、始まるドキドキとかを出すため。しかし、それだけで（生徒6）さんにながってしまうと音量負けしてしまうので、「ハッ」を入れました。ドローンの前に掛け声と間を入れるのですが、始めの掛け声は男子でためて、2回目は女子が「ヨッ」と短くすばやく言う事で、ドローン中での速度や音量を変えるきっかけにしたかったからです。
 終わり方は決めていませんが、ドローンの最後は突然小さくし、速度も通常に戻して、みんなで野太い声で締めくくられたらと考えています。

図 29 生徒5のワークシート

⑥共有や振り返りの場の設定

第4時は各グループの作品を全員で聴き合う活動を設定した。教師は発表を聴く視点として「どういう構成でつくって、どういう工夫をしているか。自分たちにはない工夫があったら教えてください。」と発問した。（図 30）は、生徒の作品例を分かりやすくするために図形譜にまとめたものである。

	絵の	もとにした手組	始め	重ねる
生徒A	トライアングル	ホ°跡°タ ヒ°ッシャーン キラッ キラッ		
生徒3	シンバル	ト°ワーン ワーン シュンシュン ハーンジュル	ハッ(全)	
生徒B	クラベス	パ°ッパ°ッパ°ッ ト°ト°ッ トーン パ°ッ パ°ッ		
生徒5	コンガ	パ°パ° 珍°珍°パ°ーン タ°タ°ン パ°ッパ°パ°	ト°ト°ト°ト°	
生徒4	アコ°コ°ベル	ヒ°ンヒ°ン ヒ°カーン ホ°ワーン ホ°ン		
生徒6	キ°ロ	シャリ シャリ スン ホ°ホ°ーン		

	絵の	もとにした手組	ドローン	終わり
生徒4	アコ°コ°ベル	ハ°ッチャ ハ°ッチャ ホ°ン ヒ°ッ ヒ°ン	ヨ°ッ(男子)	ヨ°ッ(女子1回目の後)
生徒B	クラベス	ヒ°ラヒ°ラ ハ°ーン ハ°ーン ト°ーン		
生徒A	トライアングル	ハ°シャーン ハ°シャーン シャ°シャ°シャーン		
生徒3	シンバル	シュワーン シュン ト°ン サ°ラン サ°ラン		
生徒6	キ°ロ	コ°テコ°テ シャリ シャリ ス°ー°ス°ー°		
生徒5	コンガ	ト°ト° ト°ト°ト°ト°ト°ン パ°パ° ト°ト°ン		

2回繰り返す。1回目はだんだん速く。2回目はより速く。最後はゆっくり、弱く。

図 30 作品の図形譜

この班の発表を聴いた生徒は、終わり方の特徴に気付き、「最後を小さくしていくことで終わりの感じが出ていた。」「終わる前に急に速度を緩めた。」と気付いたことを発言し、作品から思いや意図を汲み取っていた。他の班の発表からも「バラバラでやっていたリズムを最後はみんなまとまって終わっていた。」「ドローンのシンバルでだんだん速くしていた。」等、誰がどんな役割をし、その結果、音楽がどう変化していくのかに着目して聴き取っていた。さらに教師は生徒の発言を受けて「合わせるためにどんな工夫をしていたでしょうか?」「『問いと答え』を何回繰り返していたか分かりますか?」と発問することで、改めて音楽の要素によって感じられる効果や、その作品の価値に気付かせることができた。

Ⅲ. 研究のまとめ

1 研究から見えてきたこと

本研究での一番の成果は、子どもたちが意欲的に学習に取り組み、ほぼ全ての子どもたちが創意工夫して作品をつくり上げたことである。子どもたちがつくった作品は、決して偶発的に音を並べただけの音楽ではなく、一人一人の思いが表出された音楽的に価値のあるものとなった。

4つの検証授業から共通して明らかになったことは、「音楽づくり」「創作」の学習のどの場面においても子どもたちが音楽を形づくっている要素の働きを感じ取ることを大切にしていける必要があるということである。「音楽づくり」「創作」の学習に至るまでの導入の部分では、教師がこれからつくろうとする音楽について、音や音楽で例を示すようにした。歌唱したり、身体の動きを伴った活動をしたり、音楽の仕組みを単純化したパターンから聴き取ったりしたのである。これらの導入部分の活動を経ることで、子どもは音楽をつくる段階にスムーズに入っていけただけでなく、音楽を形づくっている要素の働きをもとに発想をふくらませ、音楽をつくっていくための原動力としていった。

音楽をつくり始める段階では、子どもが約束事を確実に理解していることが前提となる。この段階においても言葉による説明に頼らず、音や音楽で確認できるようにしてきたことで、子どもたちはつくる音楽への見通しをもち、工夫のポイントを捉えて音楽をつくっていくことができた。また、約束事は子どもの実態や活動の様子に合わせて設定し、図や楽譜等で視覚的に捉えさせるようにした。約束事は限定していくと作品をつくり易くなるが、発想のふくらむ余地が狭まってしまうこともある。逆に、広げ過ぎてしまうと迷いが生じ、結果的に意欲を低下させてしまうことも考えられる。約束事の設定一つで子どもの作品の価値や学習の成果が左右されてしまうため、吟味して設定していく必要がある。

音楽をつくる活動の過程では、子どもが互いにそのよさを共有できる場を設定するとともに、教師が作品の音楽的価値を見取り、価値付けしていった。すると子どもは、共有や振り返りの場でも改めて音楽を形づくっている要素の働きに気付き、そのよさや面白さを感じ取っていった。そこで得たアイディアをさらに試し、効果を実感するからこそ「もっとこうしたい。」と思いがふくらみ、作品の質が高まっていくことが分かった。

また、授業の様々な場面で、自分で納得がいくまで試行錯誤し夢中になってつくる姿、作品への思いを嬉しそうに語る姿、友達に演奏を聴いてもらって満足そうな表情を浮かべる姿が多く見られた。どの子どもも自分の作品に対する強い愛着や思いをもってつくっていたことの表れだと考える。小学生であっても中学生であっても、自分が見つけた音やつくった音楽を大切にすることは変わらず、既存の作品を再現する「歌唱」や「器楽」の学習では得られない喜びを見いだすことができたのである。「音楽づくり」「創作」の学習は、子どもが音や音楽に対する感性を高めることができる創造的な学習だということを再認識した。

題材の終わりに位置付けた「鑑賞」の学習では、旋律と伴奏とが一体化する美しさを聴き味わう姿、楽曲の構成に着目して聴く姿、我が国の伝統音楽の特徴に気付き、想像をふくらませて聴く姿等が見られた。音楽を形づくっている要素の働きを、「音楽づくり」「創作」の学習で得た音楽的感受に結び付けて感じ取ることができたのである。「音楽づくり」「創作」と「鑑賞」の学習との関連を図ることによって得られる学習の深まりも、検証授業における子どもたちの姿を通して認められた。

2 今後の課題

本研究では、世界の多様な音楽や我が国の伝統音楽を「音楽づくり」「創作」の教材として取り入れることによって、子どもたちの創造的な活動につなげることができた。教材性の高い楽曲は、著名なクラシック作品であるとは限らず、むしろ世界の多様な音楽や我が国の伝統音楽、現代作品等にも見いだすことができる。教師自身が多様な音楽に触れ、その中の音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組み等の価値を認識できるよう、感性を磨いて教材開発していく必要がある。そして、本研究で得られた成果を踏まえ、演奏の技能に不安がある子どもや音楽的な経験の少ない子どもでも楽しんで活動でき、あるいはもっと工夫したいと思う子どもも満足できる学習となるよう、「音楽づくり」「創作」を題材構成の中に位置付けていきたいと考える。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をくださいました講師の先生方、また、校長先生を始め学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

- | | |
|---|-------|
| 吉川 英史 監修『邦楽百科辞典 雅楽から民謡まで』 音楽之友社 | 1984年 |
| 『ポケット音楽辞典』 音楽之友社 | 1998年 |
| 島崎 篤子・加藤 富美子『授業のための日本の音楽・世界の音楽』 音楽之友社 | 1999年 |
| 釣谷 真弓『おもしろ日本音楽の楽しみ方』 東京堂出版 | 2002年 |
| 『日本音楽基本用語辞典』 音楽之友社 | 2007年 |
| 小島 美子 監修『日本の伝統芸能講座 音楽』 淡交社 | 2008年 |
| 佐藤 日呂志・坪能 由紀子『小学校新学習指導要領の展開 音楽科編』 明治図書 | 2009年 |
| 原田 徹『中学校新学習指導要領の展開 音楽科編』 明治図書 | 2009年 |
| 坪能 克裕・坪能 由紀子・高須 一・熊木 眞見子・中島 寿・高倉 弘光・駒 久美子・味府 美香 | |
| 『鑑賞の授業づくりアイデア集 へ～そ～なの！音楽の仕組み』 音楽之友社 | 2009年 |
| 坪能 克裕・坪能 由紀子・高須 一・熊木 眞見子・中島 寿・高倉 弘光・駒 久美子・味府 美香 | |
| 『音楽づくりの授業アイデア集 音楽をつくる・音楽を聴く』 音楽之友社 | 2012年 |

【指導助言者】

- | | |
|--------------------------------|--------|
| 日本女子大学家政学部児童学科教授 | 坪能 由紀子 |
| 淑徳大学総合福祉学部講師 | 熊木 眞見子 |
| 川崎市立小学校音楽教育研究会長（川崎市立今井小学校長） | 森岡 丈雄 |
| 川崎市立中学校教育研究会音楽科部会長（川崎市立住吉中学校長） | 大塚 和子 |
| 川崎市総合教育センター指導主事 | 仲野 雅子 |